

マチパンダ鉄道線リハビリ事業

(Machipanda Railway Line Rehabilitation)

1. 対象地域

モザンビーク国ベイラ港を起点とするベイラ回廊の鉄道線の一部であるマチパンダ鉄道線は、ベイラ港とジンバブエ、ザンビア及びDRCを結ぶ国際回廊である(図1参照)。マチパンダ線は、ベイラ港とジンバブエ国境のマチパンダを結ぶ全長317kmであり、ジンバブエ側のムタレにて切り替え基地がある。ムタレは、ドライポートとして機能しており、Cornerder de Mocambique (CdM)が運営している。

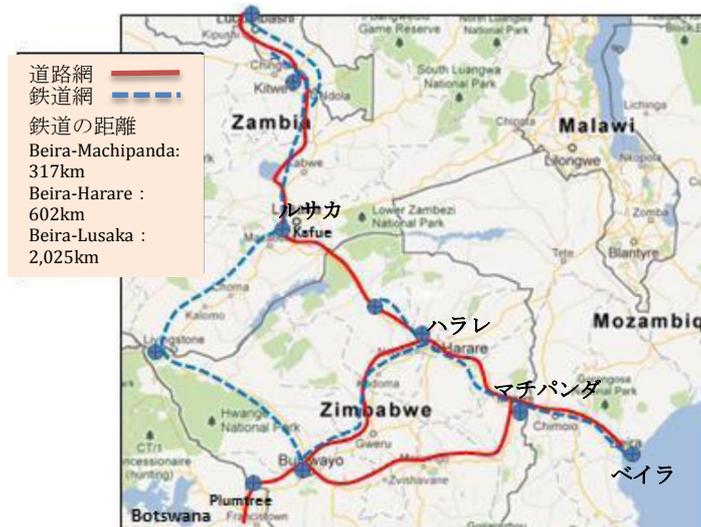


図1：ベイラ回廊とマチパンダ鉄道線の位置図

2. 背景と案件概要

2004年、マチパンダ線とセナ線を含むベイラ回廊鉄道システムは、国際競争入札の結果、インド系のコンソーシアム Ricon (Rites と Ircon International が出資) にコンセッションが供与された。右コンセッションでは、モザンビーク鉄道港湾公社 (CFM) との PPP 事業として開始され、Ricon が 51%、CFM が 49% の株を所有していた。マチパンダ線のリハビリがコンセッション契約で計画されていたが、コンセッション期間中にリハビリは実施されず、輸送量も増加するどころか低下する結果となった。また、セナ線リハビリ事業に多くの欠陥が判明したことから、2010年、モザンビーク政府は Ricon とのコンセッション契約を解除することを決定した。現在、マチパンダ線は、CFM が運営している。

一方で、内陸国からの資源の輸出 (ジンバブエのグラナイト、鉄鋼、ザンビアの銅等)、内陸国への穀物及び肥料輸入の需要が増加しており、鉄道輸送の需要も増大している。一方で、現在は多くの鉱物資源や建設資材をトラックで輸送しているため、道路に大きな負荷がかかっている。ベイラ港からマチパンダまでの鉄道輸送は、現在、約 22 時間も要しており、輸送時間の短縮が不可欠となっている。こうした中、マチパンダ線の F/S が DfID、フランス政府などの支援により実施された。F/S では、いくつかのシナリオが提案されており、第 1 シナリオでは、既存路線のリハビリを行い、輸送時間を 22 時間から 8 時間に短縮し、輸送取扱量を現在の百万トン/年から 3.5 百万トン/年に増加することが計画されている。マチパンダ線のリハビリは、民間企業が 50%、政府が 50% を融資する PPP で実施することが計画されている。

3. 進捗状況

CFM 中部によると、マチパンダ線のリハビリ事業は最優先事業であり、F/S を支援したドナーとも協議しているが、ジンバブエとの外交関係から欧州勢が支援することは難しい状況とのことである。マチパンダ線の車両は中国から調達しているが、機関車はアメリカの GE から調達している。ジンバブエ、ザンビア、モザンビークとの間でベイラ回廊に関する会合が 3 か月間毎に開催されており、本リハビリ事業に加えて、ザンビアまでの高速鉄道についても協議されている。マチパンダ線とセナ線を管理する管制室には、VALE からの支援による機材が供与されている。

4. 事業実施体制と総事業費

マチパンダ鉄道路線事業は、コンセッション方式での PPP が検討されており、CFM（モザンビーク政府）が 50%、民間セクターが 50%を出資する案が検討されている。リハビリ事業を目的としたシナリオの総事業費は、250～300 百万ドルと見込まれている。第二段階のシナリオでは、総事業費約 400 百万ドルが見込まれている。

5. セナ線の進捗状況

テテ州モアティゼ郡の炭鉱からベイラ港を結ぶセナ鉄道線は、現在、6 百万トンの石炭輸送能力があるが、20 百万トンの輸送能力に増加するための拡張事業が実施されている。2016 年 3 月にはリハビリ事業の完了が見込まれており、現在の 2 機関車・42 車両から 5 機関車・100 車両で運搬することが可能となる。この拡張事業は、ポルトガル系の Mota Engels がコントラクターとして実施されている。セナ線には、途中でマラウイに向かう路線もあるが、90 年代の洪水被害による寸断があったため、現在は運行されていない。CFM では、マラウイまでのセナ線リハビリ事業も重要であるとして検討している。

6. 日本企業の参加機会

モザンビーク中部及び内陸国の資源開発が進む中、最短距離に位置しているベイラ回廊での輸送需要は増大しており、第 1 段階の既存路線のリハビリに加えて、ザンビアまでの高速鉄道による輸送も検討されている。そのため、マチパンダ路線の PPP への参加の機会があるほか、モザンビーク及び内陸国からの資源を鉄道輸送する機会、ベイラ港からモザンビーク中部、ジンバブエ、ザンビアへの市場アクセスの機会がある。

以上